

千葉支店をリニューアル

首都圏の体制整う

第一貨物 延べ床約4倍に



鏡開きのもよう、中央に武藤社長

小型車バスを屋内に入れるインドア方式を採用し、風雨によって作業環境が悪化しないよう配慮しているほか、照明に長寿命LEDを採用するなど省エネも実現。監視カメラを30台設置するなどセキュリティも確保

第一貨物(武藤幸規社長)はきょう1日、千葉・四街道市に建設していた千葉支店をリニューアルオープンする。

同社では従来、千葉県内に1事業所(千葉支店)と1物流センターを配置し、協力会社への委託を行いながら県内全域の配送を行ってきたが、1971年に千葉市若葉区で営業を開始した旧千葉支店は、老朽化が進み

手狭ともなっていたため、移転した上で施設規模を拡大したものの、所在地は四街道市大字大作岡1-1-2。敷地面積は3万8千平方メートル。敷地建物に鉄骨造一部2階建て延べ床面積6582平方メートル。旧施設との比較では、敷地面積で約5・8倍、延べ床面積で約3・7倍となり、それぞれ大幅に拡大した。大型車は30台、小型車は36台の同時

着車が可能。車両台数は、集配用の2ト車が13台、4ト車が35台、7ト車が1台、大型車が19台、トラック3台、トラクタ3台、荷捌スペースと車庫面積を拡大したこと、ターミナル運営や集配業務の効率化など品質向上を実現するほか、近隣事業所との集配エリアの見直しを行い、あわせて集中的な営業展開による新規顧客獲得や既存顧客の拡販による増収を目指していく。1日当たりの取扱貨物量は、新規顧客分を含め到着で6000トン、発送で3400トンを見込んで

し、敷地周囲に緑地帯や調整池を配して周辺環境との調和も意識しており、災害時には近隣の避難場所としても機能する。土地は賃借、建物は第一貨物の所有。

新施設の稼働により、旧千葉支店で自社集配を行っていた千葉市周辺の6市町に加え、市原市と八千代市および印西市、成田市、栄町のそれぞれ



千葉支店の外観、大型車バス側

一部を自社集配エリアとした。また、東京支店から協力会社に配送を委託していた船橋市、木更津市、君津市、館山市など9市郡1町について、千葉支店から委託するよう見直す。

同社では、すでに開設した大宮、入間、厚木第一、厚木第二の各拠点とあわせ、順次整備が進む圏央道沿いの拠点間で、中継の効率化など高品質な輸送サービスの提供が可能になるとしており、さらに東京オリンピック・パラリンピック開催時には、東京支店をカパースサービスが提供できるようなことも可能としている。

開業前の8月28日には、現地で披露パーティを開催。主催者あいさつした武藤社長は、「当社の千葉支店は1968年に開設し、71年に現在の千葉支店に移転したが、その後多くの顧客の支持で、当社における中堅店舗に成長した。施設の老朽化と狭小化が進み、以前から移転を考えていた」と移転の経緯を述べた上で、地主、設計、施工関係者に対して感謝の意を示した。施設については、「少し規模が大きいながらも、これからの発展を計算したもので、よりよいサービスが提供できるようになる。圏央道沿いの5拠点が完成したこと、首都圏のサービス体制は完璧になった。今後東北と中央・関西間で中継効率を改善し、画期的なサービスが提供できるようになる」と展望を示すとともに、「労働力不足や燃油高騰の問題など、物流業界にはアゲインストが吹いているが、いついかなる時も継続して輸送を実施できるように、従業員が一致団結する」と強調した。

来賓からは、四街道市の佐渡斉市長、日本食研ホールディングスの越智保夫専務執行役員、日本ペイントの中村治彦千葉工場長がそれぞれ祝辞を述べ、丸建建設の小田等社長も加え5人で鏡開きを行った。